

コリント人への手紙第一 10:23-11:1 すべてにおいて神の栄光を現す

今日はコリント人への手紙第一の中で、偶像に捧げられた食べ物に関する問題についてパウロが記した部分を終わりたいと思います。来週からの2週間はクリスマスと新年のためのメッセージとなります。先週は、私たちが主の晩餐に与る者であることから、偶像礼拝に関わるべきではないというパウロの主張を見ました。第一コリント 10:23-11:1 では、以前も取り上げられていた、罪ではないけれどもクリスチャンの歩みには益とならないことがあるというテーマが取り上げられています。偶像に捧げられた食べ物を食べるかどうかという問題について、どのように対応すればよいか、非常に明確な指示を与えようとしています。ですが、彼は自分の主張を示す中において、その規則や命令自体に焦点が当たらないようにしています。それは、クリスチャン生活は律法主義的なものではなく、真に神に栄光を帰す人生を生きる自由であるからです。この神の栄光こそがパウロが目にしたかった点であり、私たちも注目すべき点です。では、神の栄光についてパウロがこの部分でどのように示しているのかを祈ってから見ていきましょう。

まずは23節から読みましょう。「**「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。24. だれでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい。**」まずはここで止めておきましょう。これは、第一コリント6章で性的不道徳について論じている時に言っていたことです。コリント第一6:12にはこうあります。「**「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。」**どちらの場合も、私たちはキリストに在って自由ではあるけれども、その自由を悪用すれば、不道徳の場合であればその罪によって自分自身に、また偶像に捧げられた食べ物を食べる場合であれば他の人に害を及ぼす可能性があるということです。私たちは、民主的な政治や社会から学んだ資本主義的な価値観を、神の国の原理に当てはめすぎないように注意する必要があります。神の言葉を語るパウロにとって、その価値とは自身の決断を支配する自分の益ではなく、常に相手の益という価値です。そのことはコリント第一13章の愛についての素晴らしい聖書箇所を読むとよく分かります。8章での弱い人たちについての議論から、9章での自分の権利を放棄することまで、すべてがキリスト教のこの側面に繋がっています。イエス・キリストへの真の信仰を示すということは、愛ゆえに自分よりも他を優先することを意味します。それは、イエス・キリストが私たちの罪の代価を償うために進んで十字架にかかることで私たちのために成してくださったことです。ヨハネ3:16によれば、「神は世を愛された」からそうしてくださったのです。では、この偶像に捧げられた食べ物を食べるという場合はどうでしょう。権利を放棄するという議論から導き出した結論を示しながら、彼はとても具体的な指示を与えています。25節から読みましょう。

「25. 市場で売っている肉はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。26. 地とそこに満ちているものは、主のものだからです。27. あなたがたが、信仰のないだれかに招待されて、そこに行きたいと思うときには、自分の前に出される物はどれも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。28. しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。29. 良心と言っているのは、あなた自身の良心ではなく、知らせてくれた人の良心です。私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるのでしょうか。30. もし私が感謝して食べるなら、どうして私が感謝する物のために悪く言われるのでしょうか。」8章の始めに述べられた疑問に対する彼の結論は、家で家族と食べるために市場で肉を買うなら、そこで売られているものは何でも良心の呵責を覚えることなく自由に食べなさいというものでした。ただ、市場へ行って、それがどこから来たものかを聞いて回る必要はないとしています。「良心の問題を問うことをせず」と言っています。もしどこから来たのかを尋ねて、それが偶像に捧げられた物であるにも関わらず、それを買ったとしたら、売り手やそれを見ていた人は、偶像礼拝を支持しているのとらえることでしょう。ですが、どこから来たかを尋ねないならば、その食べ物がどこから来たのかには関心が無いということになります。市場で売られている肉を買うのか、偽りの宗教の神殿に直接行って肉

を買うのかの違いが鍵となります。偽りの礼拝の場である神殿を出て、宗教的な意味を持たない市場という場所で売られる肉は、偶像礼拝とは関わりのないものです。そしてパウロは「地とそこに満ちているもの 世界とその中に住んでいるもの それは主のもの。」と詩篇 24:1 を引用しています。肉もその他の全てこの世に在る良いものは神からのものであり、楽しむことができます。偶像に捧げられた食べ物が出されるもう一つの場合は、誰かの家に招待されて食事を共にするときです。同じように、誰かの家に行って（この場合は特に未信者の方ですが）、その食べ物をどこで手に入れたのかと尋ねるようなことはありません。

出されたものは何でも食べます。28 節にあるように、それがどの宗教に関連するものかを明かされるまでは。「しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、食べてはいけません。」このことは、主催者が「神々に祝福してもらった食事です」とアナウンスするような食事の席に、コリントの人々が招かれた場合問題となります。乾杯とやるように、ワインを飲む際に偽りの神の名を唱えるような習慣もありました。もちろんクリスチャンはそれに加わることはできませんでしたし、自分は偽りの神ではなくイエス・キリストの御名を求める者だということを明らかにすべきです。同じ状況で他のクリスチャンから同様の指摘を受ける事もあるかも知れませんが、いずれにせよパウロの答えは変わることはありません。指摘をされた時点で食べないことです。その時点で食べ続けることは、未信者の人たちに偶像崇拜は全く問題ないというメッセージになりかねないからです。あるいは、指摘してくれた信徒自身、食べるべきか食べるべきでないか心の中で悩んでいたとしたら、その人の良心を傷つけてしまうかも知れません。ですから、29 節にあるように、彼らの良心のために食べることを控えるのです。29 節の最後は「私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるのでしょうか。」とあるので、一見パウロはこの議論を完全にひっくり返しているように見えるかも知れませんが、食べるのを控えるという意見を撤回することはありません。30 節では、個人としてはそれを食べて神に感謝することができるけれど、神が自分に与えてくださったと思うものが、実際にはキリストを証しすることの妨げになることは避けたいと言っています。ですから彼は「もし私が感謝して食べるなら、どうして私が感謝する物のために悪く言われるのでしょうか。」と言っています。

彼にとって、周囲に対してキリストを肯定的に示すことが全てでした。それは 31 節で述べている重要な点ゆえです。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」これがこの偶像に捧げられた食べ物についてパウロが述べてきたことすべての鍵となることであり、この書簡全体でパウロがあらゆる形で述べている重要な点でもあります。異なる人に従うことで起こる教会の不一致であろうと、性的な振る舞いであろうと、偶像に捧げられた食べ物であろうと、私たちの選択と行動を支配するのは神に栄光を帰することであるはずなのです。多くの場合、私たちは自分中心に決断をします。何が私を幸せにしてくれるか、何が私を良く見せる事になるか、何が私の人生と健康に良いか、何が私の老後の人生の備えとなるか…この世にあるほとんどの人にとって人生を定義するのは自分自身です。ですが、クリスチャンにとって自己満足や自己実現が自分たちの人生の中心では決してありませんし、神の祝福を得るために何かをするといったスピリチュアルなものでもありません。テモテへの手紙第二で、パウロはキリストの再臨前、終わりの日の兆候の一つは、人々がますます自己中心的になることだと言っています。テモテへの手紙第二 3:1-2 はこのように言っています。「1. 終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。2. そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。」その言葉の多くは自己中心であることを表しています。パウロがここで何を言っているのか、深く考えてみる必要があります。「食べるにも飲むにも…」一方でパウロは明らかに偶像に捧げられた食べ物と主の晩餐を結び付けていますが、他方ではより多くの事を語っているように思えます。食べる事、飲むことは、私たちの生活において最も単純な事であり、呼吸することと同じく最も必要な事でもあるといえます。ですが、そのような生活の最も単純な部分においてでさえ、私たちは神に栄光を帰するのです。神の栄光のためにできないことなど、罪以外に何もありません。そして、たとえ罪においてでさえ、私たちが悔い改め、自分たちでは

聖くなることができないことを認める事で神に栄光を帰することができるのです。毎日、目を覚ますとき、「今日私がやること、言う事、考える事のすべてが、神であるあなたに栄光を帰すものでありますように」というのが、一日の最初の祈り、最初の思いであるべきです。では、すべてにおいて神に栄光を帰するとは、具体的にどういうことなのでしょう。以前紹介した偉大な聖書教師のジョン・ストットさんが毎日祈った言葉、私もそうするよう心がけていますが、日々神に栄光を帰することを望むなら、どうすれば良いかを端的に示しています。日ごとにこれらの言葉が私たちの祈りであるべきです。天のお父様、主イエス様、聖霊様、おはようございます。天のお父様、この世の作り主であり、この宇宙を御手に治めるあなたを賛美します。主イエス様、この世の救い主であり、この世の主であるあなたを賛美します。聖霊様、神の人々を聖別するあなたを賛美します。父と子と聖霊に栄光がありますように。天のお父様、今日も御前に在り、ますますあなたを喜ばせる者となれますように。主イエス様、今日、私が自分の十字架を負って、あなたに従っていくことができますように。聖霊様、今日私を満たし、御霊の実である愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制を私の内に豊かに実らせてくださいますように。聖く、栄光に満ちた三位一体の神様、どうぞ私を憐れんで下さい。アーメン。神に栄光という言葉だけではなく、キリストに従い、御霊の実がその歩みの中に明らかになる行いこそが、真に神に栄光を帰すことにつながるのです。イエスは、クリスチャンの生活の全てを二つの事に要約しておられます。マタイ 22:37-40 にはこうあります。「37. イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』38. これが、重要な第一の戒めです。39. 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。40. この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」神に栄光を帰すとは、イエスが示された第一の戒めのとおり、心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、神を愛することです。もし私たちが神に栄光を帰すことで神を愛しているならば、必然的に私たちの隣人も愛するでしょう。この二つは相伴うものです。そして、隣人を愛するという事は、キリストにある兄弟姉妹の良心を蔑ろにしたり、未信者の人たちに私たちの神が偽りの神々と何も変わらないと思う理由を与えたりしないことも意味します。このことは偶像に捧げられた食べ物についての議論と直接関係することであり、神に栄光を帰することを述べた直後に説明されています。10章最後の32-33節を読みましょう。「32. ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。33. 私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。」

パウロにとって、彼の人生はとてもシンプルなものでした。神を愛し、他者を愛せよというイエスの命令に従うことです。彼にとっての他者とは、同胞であるユダヤ人であり、また異邦人であり、ユダヤ人以外の人、そして真の霊的な家族である教会でした。彼はすべてにおいて神に栄光を帰そうとすることで神を愛し、自分の必要や欲望よりも他者のそれらを優先することで他者を心から愛し、大切にしようと思いました。それらはすべて、人々が救われ、その人生を通して神に栄光を帰するようになるためでした。そのような生き方をしていたからこそ、この箇所の終わりにパウロはコリント第一 4:16 で述べたのと同じことを11章の始めにも述べています。「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」英語の聖書のどの訳も欽定訳に倣ってこの節を11章の最初に置いていると思いますが、これは実際は8章から10章までに述べられた彼の思いをまとめた節です。4章でもお話ししましたが、このような発言をするのは相当な覚悟を必要とします。「私に倣う者でありなさい。」誰かに「私に倣って神に栄光を帰しなさい」と言えるほど、私たちは真に神に栄光を帰することを望み、自分の生き方を通して神に栄光を帰しているのでしょうか。私自身、自分の人生において絶対にそうは言えないと思うことが多々あります。またパウロが4章では述べなかったことを補足していることに注目してください。彼は、私がキリストに倣っているように、あなたも私に倣ってくださいと言っています。彼に倣う者となることは自分のようになりなさいということではなく、キリストに栄光を帰すことにおいてでありました。偶像に捧げられた食べ物に関する学びから得られるものが一つあるとすると、それは次のようなことです。私たちがこの世で行うすべてのことは、神に栄光を帰すこ

とであり、他人の目を自分にではなく、イエス・キリストに向けさせることであるべきです。周りにある偽りの宗教との関わりの中で、私たちはそのようにしているでしょうか。仕事場で話し合う時に、仕事のやり方において、読んだり見たり聞いたりして自分の頭や心に入れることにおいて、子ども達に教えたり手本となったりすることにおいて、配偶者への接し方において、その他たくさんのキリストとの歩みにおいて神に栄光を帰すような行いをしているでしょうか。多くの場合、していないのではないのでしょうか。アドベントの最後の週である今週、クリスマスにお生まれになったキリストの誕生を祝い、ベツレヘムに生まれた赤ちゃんの内に示された神の愛を見るとき、自分自身に問いかけていただきたいと思います。その飼葉おけに生まれ、十字架につけられたのち復活した神の子であるイエス・キリストと私たちの関係が、神と他者に対する愛を変えるでしょうか。神に栄光を帰すことを通して真に神を愛し、また神に栄光を帰したいという願いゆえに、その愛を他者に示しているでしょうか。私たちの願いと日々の祈りが「食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」というパウロの言葉と同じものでありますように。祈りましょう。

1 Corinthians 10:23-11:1 God's glory in all things

Today I am finishing up this section of 1 Corinthians where Paul deals with the question of eating food offered to idols. The next two weeks will be special messages for Christmas and New Year's Day. Last week, we saw as Paul began to draw his argument to an end that he makes the case against involvement with idolatry based on our participation in the Lord's Supper. Now in 1 Corinthians 10:23-11:1, he is going back to a theme that we have seen before in addressing this, that just because something may not be sin, it also may not be helpful in your Christian walk. He is finally going to give very clear instructions on how to handle this particular issue of eating food offered to idols. But in finally showing where the argument he is making is leading, he doesn't want the focus to be on the rule, the command he is giving. Because the Christian life is not legalism, it is freedom to live in a way that truly glorifies God. That is where the focus lies for Paul, and that is where the focus should be for us – God's glory. So, let's pray and see how Paul wraps this up by pointing us to God's glory.

Let's begin reading at verse 23. ²³ "All things are lawful," but not all things are helpful. "All things are lawful," but not all things build up. ²⁴ Let no one seek his own good, but the good of his neighbor. Let's stop here for now. This is going back to what he said as he was discussing sexual immorality in 1 Corinthians 6. Verse 12 of 1 Corinthians 6 says, ¹² "All things are lawful for me," but not all things are helpful. "All things are lawful for me," but I will not be dominated by anything. The idea in both cases is that we have freedom in Christ, but we can misuse that freedom and harm ourselves through sin in the case of immorality or others in the case of eating this food offered to idols. We need to be careful about assigning too many capitalistic values that we treasure from our more democratic forms of social government and society to God's economy in His kingdom. For Paul who is speaking God's Word to us, the values are not our own good that governs our decision, but always the good of the other. That becomes really clear when we get to his great passage on love in 1 Corinthians 13. From his discussion of the weaker brother in chapter 8 to the giving up his rights in chapter 9, everything is pointing to this aspect of Christianity. That demonstrating true faith in Jesus Christ means that we put others ahead of ourselves out of love for them. This is what Jesus Christ did for us in willingly going to the cross to pay for our sins because "God so loved the world..." according to John 3:16.

So what does that mean in this case of eating food offered to idols? This is when he gives very specific instructions, showing his conclusions drawn from the arguments he has been making about giving up your rights. Let's begin reading at verse 25. ²⁵ Eat whatever is sold in the meat market without raising any question on the ground of conscience. ²⁶ For "the earth is the Lord's, and the fullness thereof." // ²⁷ If one of the unbelievers invites you to dinner and you are disposed to go, eat whatever is set before you without raising any question on the ground of conscience. ²⁸ But if someone says to you, "This has been offered in sacrifice," then do not eat it, for the sake of the one who informed you, and for the sake of conscience— // ²⁹ I do not mean your conscience, but his. For why should my liberty be determined by someone else's conscience? ³⁰ If I partake with thankfulness, why am I denounced because of that for which I give thanks?

His conclusion to what began as a question at the beginning of Chapter 8, is that if you are in the market buying meat for your family to eat at home, feel free to eat anything that is sold there with no guilt. He makes clear that you don't go to the market

questioning the origin of the food, either. He says, “**without raising any question.**” If you did question the origin and if it was offered to idols, bought it anyway, the seller or someone witnessing the purchase could interpret that as support for the idolatry. However, by not asking you are indifferent to that background of the food. The difference between the meat sold in the markets and whether you went directly to a temple of false religion to get it is the key to this. Once the meat is no longer in the setting of the temple, the place of false worship, the meat market is a neutral area with no religious significance, so the meat has lost its connection to idolatry. Then he quotes from [Psalm 24:1](#), [The earth is the Lord's and the fullness thereof, the world and those who dwell therein](#). Meat and all good things in this life come from our God and can be enjoyed. The other place where you may encounter idol offered food is when you are invited to share a meal at someone's house. In the same way, you don't go to someone's house, in this case an unbeliever especially, and start asking where the food came from.

You eat whatever they give you, until the religious history of the food is pointed out in verse 28. **But if someone says to you, “This has been offered in sacrifice,” then do not eat it...** This could be raised as an issue because there were meals where the Corinthians were invited that the host may want to point out that they had made sure to get the meal blessed by the gods. There were also customs of invoking a false god's name over a glass of wine, sort of like a toast or kanpai. Of course, the Christian could not join in that or should make clear that he is invoking the name of Jesus Christ and not the false god. The issue could also be raised by another Christian at the same event that points it out to you, and Paul's answer remains the same either way. You don't eat it once the point has been raised. To do so at that point could send the message to the unbeliever that their idolatry is perfectly okay. Or it could damage the conscience of the believer who raised the point because they could have been struggling with it in their hearts as to whether to eat or not. So for the sake of their conscience as verse 29 points out, you refrain from eating. And at first reading it might seem like Paul flips the argument completely on its head when he ends verse 29, **For why should my liberty be determined by someone else's conscience?** But he's not going back on what he is saying about refraining from eating the food. He makes the point with verse 30 that while he can personally eat the food and be thankful to God for it, he doesn't want something that he understands God is providing for his good to actually harm his testimony for Christ. So he says, **³⁰ If I partake with thankfulness, why am I denounced because of that for which I give thanks?**

For him, everything was about reflecting Christ in a positive light to those around him, because of his key point that he now makes in verse 31. **³¹ So, whether you eat or drink, or whatever you do, do all to the glory of God.** This is the key to everything that Paul has been saying about in this section about food offered to idols and really in many ways the main point that Paul is making in the entire book. Whether it is disunity in the church because of following different personalities or how we conduct ourselves sexually, or food offered to idols, giving glory to God should govern our choices and actions. Too many times, we make decisions based on me. What makes me happy, what makes me look better, what best preserves my life and health, what preserves my retirement... Me and I are what defines life for most people in this world. But for the Christian, the central focus of our life can never be self-fulfillment or self-actualization or even some spiritual notion of doing something for the purpose of receiving God's blessing. In 2Timothy, Paul actually makes the point that one of the signs of the last days before

Christ's return is that people will become more and more self-centered. 2Timothy 3:1-2 says, [But understand this, that in the last days there will come times of difficulty. 2 For people will be lovers of self, lovers of money, proud, arrogant, abusive, disobedient to their parents, ungrateful, unholy...](#) So many of those words revolve around one thing – being self-centered.

We should think deeply about what statement Paul is making here. [Whether you eat or drink...](#) Now on the one hand, Paul obviously is making a connection to the food offered to idols and the Lord's Supper, but on the other hand, he seems to be saying much more. Eating and drinking are about the simplest things we do in our lives and along with breathing, probably the most necessary. But even in the simplest details of life, we are to glorify God. There is nothing we cannot do to God's glory, except sin. And even in sin, God is glorified in our repentance and acknowledgement of our inability to be holy. [Every day when we wake up, our first prayer, even our first thought should be, "Let everything I do, say and think today glorify you, God."](#) So what exactly does it mean to glorify God in everything. I think the words of the prayer I have mentioned before that the great Bible teacher John Stott prayed every day, and that I try to do as well, really captures what we want if we want God to be glorified in everything. These words should reflect our prayer every single day. [Good morning heavenly Father, good morning Lord Jesus, good morning Holy Spirit. Heavenly Father, I worship you as the creator and sustainer of the universe. Lord Jesus, I worship you, Savior and Lord of the world. Holy Spirit, I worship you, sanctifier of the people of God. Glory to the Father, and to the Son and to the Holy Spirit. Heavenly Father, I pray that I may live this day in your presence and please you more and more. Lord Jesus, I pray that this day I may take up my cross and follow you. Holy Spirit, I pray that this day you will fill me with yourself and cause your fruit to ripen in my life: love, joy, peace, patience, kindness, goodness, faithfulness, gentleness and self-control. Holy, blessed and glorious Trinity, three persons in one God, have mercy upon me. Amen.](#) It's not just words saying glory to God, but actions of following Christ and having the Holy Spirit's fruit evident in our lives that will lead to us truly giving glory to God.

Jesus sums up the entire Christian life by two things. Matthew 22:37-40 says, [37 And he said to him, "You shall love the Lord your God with all your heart and with all your soul and with all your mind. 38 This is the great and first commandment. 39 And a second is like it: You shall love your neighbor as yourself. 40 On these two commandments depend all the Law and the Prophets"](#) To glorify God is to obey the first commandment that Jesus highlights – [Love the Lord your God with all your heart, soul and mind.](#) But if we are loving God by glorifying him, then it is inevitable that we will be loving our neighbor. They go hand in hand. And to love our neighbor means that we do not offend the conscience of our brother or sister in Christ or give an unbeliever reason to believe that our God is no different than their false gods. So this directly ties to his focus on the food offered to idols, and explains why right after focusing on giving glory to God, we read the final verses of chapter 10, verses 32-33. [32 Give no offense to Jews or to Greeks or to the church of God, 33 just as I try to please everyone in everything I do, not seeking my own advantage, but that of many, that they may be saved.](#)

For Paul, his life was very simple. Obey Jesus' command to love God and love others. Those others were his own people, the Jews, but also the Gentiles, non-Jews and his true spiritual family, the Church. He loved God by seeking to glorify him in all things, and

he loved others by truly loving them and seeking to care for them by putting his own needs and desires below theirs. It was all for the purpose that they too could glorify God with their lives by being saved. Because he lived this way, he could end this section by saying the same thing starting chapter 11 that he said earlier in [1 Corinthians 4:16](#) **11 Be imitators of me, as I am of Christ.** Although I think every English translation follows the King James version in putting this verse at the beginning of chapter 11, it really finishes his thoughts of chapters 8-10. As I said in chapter 4, this is a sobering statement to make. **Be imitators of me.** Are we confident enough in our desire to glorify God, and in the life we live glorifying God, that we would tell someone, “imitate my life and how I glorify God.” There are too many times I know I definitely cannot say that in my own life. And notice how Paul caveats this statement which he didn’t in chapter 4. He says only imitate me, as I imitate Christ. Imitating him was still not about himself, it was about glorifying Christ. If there is one big point to take away from this entire study of food offered to idols, it is this. Everything we do in this life should be about giving God the glory, pointing others to Jesus Christ and not ourselves. Are we doing that in how we interact with the false religions around us? But also are we doing that with what we discuss at work... how we do our work... what we put into our heads and hearts through what we read, watch or listen to... what we teach and model in front of our children... how we treat our spouses... and a thousand other things that our walk with Christ should be affecting for God’s glory, but too many times does not. On this final week of Advent as we look forward to celebrating Christ’s birth at Christmas and the love God showed to us in that baby born in Bethlehem, we should ask ourselves this. Does our relationship with the one born in that manger, the crucified and risen Son of God, Jesus Christ, change our love for God and for others? Do we truly love him by glorifying him and show that love to others out of that same desire to glorify God? Let our desire and our daily prayer be Paul’s words, **So, whether [I/We] eat or drink, or whatever [I/We] do, [May I/We] do [it] all to the glory of God.** Let’s pray.